

進路だより

箕輪進修高校 進路指導室

2010.12.20

No. 68

自分に小さな枠をはめずプラス思考で生きる

昔の教え子の同級会に呼ばれた際、昔のイメージとは随分変わったと思われることがしばしばあります。以前はおとなしく目立たない存在のものが、極めて明るく活発になっているというように。

皆さんは今自分自身に対してどのようなイメージを持っているのでしょうか。自分はこういう人間だと思っていると、何となくそうした自分となってしまいます。環境が変わり、心境も変わりいつの間にか自分自身が変わるということは一般的にあることです。

つまり、人間は心の持ち方により、随分変わりうる存在なのです。自分で自分に対して「こういう人間だ」と勝手なイメージを抱き、それに自分をいつまでも縛り付け（自分に枠をはめ）てしまうと、いつまで経っても変わることが出来なくなります。勿論良い面までかえる必要はありませんが、もし仮に自分に対してマイナスイメージを持っていることがあるならば、そうしたことはもっと積極的に変えるように心がけると知らず知らずのうちに変え得るものです。

「マイナス思考ではなくプラス思考で生きなさい」と色々な人が折にふれて言いますが、やはりプラス思考で生きていくと、人生もプラスに転じていくものだと思います。皆さんも新しい旅立ちを目前にひかえて、これから環境も変わります。そんな折だからこそ自分を変えるチャンスです。自分にはめた心の枠を少しでも広げて、プラス思考で生きていって欲しいものです。



人間万事塞翁が馬

中国の有名な話ですので一度は聞いたことがあるでしょう。昔中国の危険の絶えない国境近くのある村に、老人が住んでいました。その老人は、人々から「塞（とりで）の近くに住んでいる翁（おきな）」、すなわち「塞翁（さいおう）」と呼ばれていました。ある時、その老人の飼っていた馬が、北方の異民族の地へと逃げて行ってしまいました。馬は貴重な労働力であり、財産です。人々が「お気の毒に」と声を掛けると、その老人は「これが福をもたらさないとも限らないさ」と応えました。数ヶ月後、逃げていった馬が、駿馬を引き連れて帰って来ました。人々が「おめでとうございます」とお祝いを述べたところ、老人は「これが災いを引き起こさないとも限らない」と応えました。

やがて家には良馬が増え、老人の息子は乗馬を好むようになりましたが、ある時馬から落ちて、足の骨を折ってしまいました。人々が「お気の毒に」と慰めると、老人は「これが福をもたらさないとも限らないよ」と応えました。それからまもなくして、異民族が攻めて来ました。村の健康な男子は皆戦場に赴き、多くの若者が戦死してしまいました。老人の息子は足が不自由なために戦いに駆り出されずに済み、父子ともに無事だったといえます。

これより人生は吉凶・禍福が予測できないことのとえとしてこの言葉が用いられるようになりました。私達の人生は常に良いことや悪いことだけが続くわけではありません。悪いことが起きてもやがて良いこともあると希望を持っていれば、そうなるでしょう。また良いことが起きてもそれをおごり高ぶってもいけません。一時の幸運や不幸で一喜一憂せず、長い目で人生を見つめることが大切です。皆さんのこれからの人生訓の一つとしてこの言葉を思い出して欲しいものです。